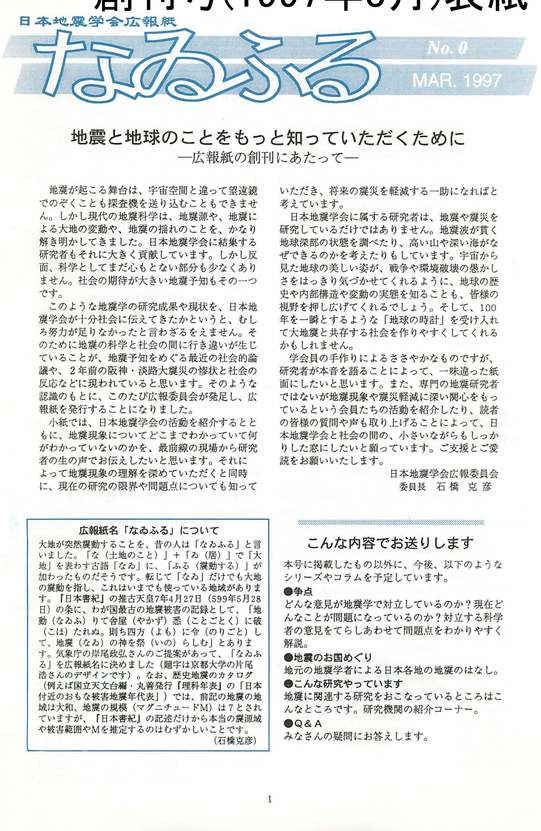
広報委員会の活動
Public relations committee

広報紙「なゐふる」発行

3か月毎の地震活動に加えて、研究者等に**毎号3つの話題**について、分かりやすく記事を執筆していただいています。今後も、学会員の皆さんのご協力をよろしくお願いします。

創刊号(1997年3月)表紙


日本地震学会広報紙
なゐふる No. 0 MAR. 1997

地震と地球のことをもっと知っていただくために
―広報紙の創刊にあたって―

地震が起こる舞台は、宇宙空間と違って望遠鏡でのぞくことも探査機を送り込むこともできません。しかし現代の地震科学は、地震波や、地震による大地の変動や、地震の揺れのことを、かなり解き明かしてきました。日本地震学会に結集する研究者もそれに大きく貢献しています。しかし反面、科学としてまだ心もとない部分も少なくありません。社会の期待が大きい地震予知もその一つです。

このような地震学の研究成果や現状を、日本地震学会が十分社会に伝えてきたかというと、むしろ努力が足りなかったと言わざるをえません。そのために地震の科学と社会の間に行き違いが生じていることが、地震予知をめぐる最近の社会的論議や、2年前の阪神・淡路大震災の惨状と社会の反応などに現われていると思います。そのような認識のもとに、このたび広報委員会が発足し、広報紙を発行することになりました。

小紙では、日本地震学会の活動を紹介するとともに、地震現象についてどこまでわかっていてわかっていないのかを、最前線の現場から研究者の生の声でお伝えしたいと思います。それによって地震現象の理解を深めていただくと同時に、現在の研究の限界や問題点についても知っていただき、将来の震災を軽減する一助になればと考えています。

日本地震学会に属する研究者は、地震や震災を研究しているだけではありません。地震波が貫く地球深部の状態を調べたり、高い山や深い海がなぜできるのかを考えたりもしています。宇宙から見た地球の美しい姿が、戦争や環境破壊の悲かしさをはっきり気づかせてくれるように、地球の歴史や内部構造や変動の実態を知ることも、皆様の視野を押し広げてくれるでしょう。そして、100年を一瞬とするような「地球の時計」を受け入れて大地震と共存する社会を作りやすくしてくれるかもしれません。

学会員の手作りによるささやかなものですが、研究者が本音を語ることによって、一味違った紙面にしたいと思います。また、専門の地震研究者ではないが地震現象や震災軽減に深い関心をもっているという会員たちの活動を紹介したり、震災の皆様の質問や声も取り上げることによって、日本地震学会と社会の間の、小さいながらもしっかりした窓にしたいと願っています。ご支援とご愛読をお願いいたします。

日本地震学会広報委員会
委員長　石橋　克彦

広報紙名「なゐふる」について
大地が突然震動することを、昔の人は「なゐふる」と言いました。「な（土地のこと）」＋「ふ（揺）」で「大地」を表わす古語「なゐ」に、「ふる（震動する）」が加わったものだそうです。転じて「なゐ」だけでも大地の震動を指し、これはいまでも使っている地域があります。『日本書紀』の推古天皇7年4月27日（599年5月28日）の条に、わが国最古の地震被害の記録として、「地動（なゐふる）りて舎屋（やかず）悉（ことごとく）に破（こは）たれぬ。則ち四方（よも）に令（のりごと）して、地震（なゐ）の神を祭（いの）らしむ」とあります。気象庁の岩城敏弘さんのご提案があって、「なゐふる」を広報紙名に決めました（題字は京都大学の片尾浩さんのデザインです）。なお、歴史地震のカタログ（例えば国立天文台編・丸善発行『理科年表』の「日本付近のおもな被害地震年代表」）では、前記の地震の地域は天和、地震の規模（マグニチュード[M]）は7とされていますが、『日本書紀』の記述だけから本当の震源域や被害範囲やMを推定するのはむずかしいことです。
（石橋克彦）

こんな内容でお送りします
本号に掲載したもの以外に、今後、以下のようなシリーズやコラムを予定しています。
●争点
どんな意見が地震学で対立しているのか？現在どんなことが問題になっているのか？対立する科学者の意見をてらしあわせて問題点をわかりやすく解説。
●地震のお固めくり
地元の地震学者による日本各地の地震のはなし。
●こんな研究やっています
地震に関連する研究をおこなっているところはこんなところです。研究機関の紹介コーナー。
●Q＆A
みなさんの疑問にお答えします。

1

なゐふる 2024.2 日本地震学会広報紙 No. 136

Contents
2 新潟地震
4 大型岩石摩擦実験が解き明かす地震の複雑さ
6 若手研究者による座談会(上)
8 イベント報告
・日本地震学会2023年度秋季大会―一般公開セミナー「関東大震災から100年－過去を学び、将来に備える－」開催報告
・地震学夏の学校2023　開催報告

主な地震活動 2023年10月～2023年12月
気象庁地震火山部 菅沼 一成

なゐふる 2024.5 日本地震学会広報紙 No. 137

Contents
2 鳥島近海から突然押し寄せた「謎の津波」の正体は
4 民間GNSS観測点の地震学への応用
6 若手研究者による座談会(下)
8 イベント報告
・2023年度ジオパーク巡検報告 ～箱根火山と関東地震～

主な地震活動 2024年1月～2024年3月
気象庁地震火山部 菅沼 一成

なゐふる 2024.8 日本地震学会広報紙 No. 138

Contents
2 1994年三陸はるか沖地震から30年 ―地震学が学んだこと―
4 能登半島周辺のテクトニクスと震源断層
6 1964年新潟地震で生まれた災害放送の原型
8 ●イベント報告　オンライン談話会－2024年能登半島地震－の関催
●イベント案内　日本地震学会2024年度秋季大会一般公開セミナー「新潟から神戸にかけておこる被害地震に迫る ―2024年能登半島地震から考える―」のお知らせ

主な地震活動 2024年4月～2024年6月
気象庁地震火山部 菅沼 一成

記者懇談会開催

報道関係者と地震学会の会員との意思疎通を目的として、1997年3月から記者懇談会を開催してきました。毎年、地球惑星科学連合大会と日本地震学会秋季大会に併せて、研究者等に**ホットな話題**や**開催地にゆかりのある話題**について講演していただき、マスコミ関係者と活発な議論がなされています。最近の話題提供の内容は表の通りです。

最近の記者懇談会の開催状況と話題提供者・講演内容

回(年)場所	話題提供者・題目
50 (2021) オンライン	松澤 暢　東北大学大学院理学研究科 「東北沖地震から10年 」
51 (2022) オンライン	山田真澄　京都大学防災研究所 「2022年1月トンガ火山の噴火による津波の謎」
52 (2022) 札幌市	高井伸雄　北海道大学大学院工学研究院 「2018年北海道胆振東部地震の高震度地域の地震動に関して」
53 (2023) 千葉市	金田義行　香川大学 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 「トルコ　カフラマンマラシュ地震に関する報告ならびにSATREPS MARTESTプロジェクトについて」
54 (2023) 横浜市	酒井慎一　東京大学大学院情報学環・学際情報学府 「関東地震と首都直下地震　～その予測と現状把握～」
55 (2024) 千葉市	佐藤比呂志　東京大学名誉教授 「日本海の地震・津波と震源断層モデル―能登半島地震を例として」
56 (2024) 新潟市	佐竹健治　東京大学名誉教授 「日本海沿岸の海底活断層と津波」

2024年10月21日 17:45～18:45
朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター3階中会議室301
（地震学会B会場）

対面開催で行っています

質問対応

一般の方からの質問対応及びマスコミからの問い合わせを担当しています。

地震学会ホームページのFAQの更新

地震学会ホームページ（http://www.zisin.jp/）の一般の方への情報やFAQを担当しています。

ご意見等は広報委員会までお知らせください。

QRコード地震学会FAQ

「なゐふるギフト」への参加のお願い

2024年度は、211件へお届け

教育の現場に「なゐふる」を！
会員の皆様、ご協力をお願いします！
自分の母校やお子さんの学校等に寄贈する
「なゐふるギフト」制度
年額600円

お申し込みは学会事務局へ

理科や社会の授業のほか、防災訓練やクラブ活動など活用の機会は多数

学会の財政面からは、すべての小中高校に寄贈することは困難です。